

Retro-Future

古くて新しい もうひとつのビンテージオーディオ

ビンテージといえば、アルテックやタンノイ、JBL、マッキントッシュなどが誌面に取り上げられる機会が多い。しかし、当時これらの老舗と肩を並べるほかの多くのブランドがあったことを知る人は少ないだろう。東京、目黒にあるビンテージショップ「アトリエJe-tee」では、音質はもちろん、デザインにもこだわった「もうひとつのビンテージ」を数多く紹介している。本企画では、同店で販売されている製品を中心に、毎号テーマとなるブランドを取り上げている。

第10回 トウルーソニックの大型スピーカー

STEPHENS Tru-Sonic

analog vol.22 でも御紹介したSTEPHENS Tru-SonicはJ.B.ランシング氏と共に1930年代からスピーカーの開発をしていたロバートステフェンス氏によって1941年頃にカリフォルニアに設立。当時から製品のクオリティーが高く、プロ用音響機器や仕上げの美しい高級ハイファイスピーカーをメインに生産し、オーディオファン憧れのブランドだった。残念ながら日本でもオーディオブームが始まる70年代には先に50年代頃にピークを迎えていた欧米のオーディオブームは下火になりSTEPHENS社のほとんどの製品も日本には紹介されていない。

本文 / 田中伊佐資
キャプション / 岡田圭司(アトリエJe-tee代表)
撮影 / 小林幹彦(彩虹舎)

P-63HF

1940年代後期にシアター用やプロユースを目的に開発された大型システム。その壮大なスケール音と大型ながらクリアで抜けの良いサウンドは2発の103LX38cmウーファーとH625 / P30ドライバーのコンビネーションから繰り出される。生産台数が少ないためアメリカでも入手が困難でステレオでペアで試聴できる事がめったにない伝説の名機である。



P-63HFのキャビネットは響きの良い米松合板で構成され、その構造は当社が好んで採用しているスリットタイプの低音放射方式になっており、低音は正面ホーンの両サイドのスリットから放出される。そしてH625 10セルホーンを装着したP30ドライバーが内部補強板に載せられている。当時は600Hzの専用ネットワークを使った2wayシステムとして活躍していたが、このシステムに当社の5KTツイーターを追加して3wayシステムとする事でより最新の録音ソースにも対応が可能になる。外観は初期タイプはホーンもすべて同色のハンマートン塗装。後期タイプはホーンが黒塗装で箱はハンマートンに仕上げられている。サイズ 高さ125cm、幅90cm、奥60cm、重量105kg。市場価格は450~500万円ペア



Retro-Future

古くて新しい もうひとつのビンテージオーディオ



P30 Driver

当社の最高品位のドライバーで3.5インチ(約9cm)のアルミ製ダイアフラムを強力な大型アルニコマグネット駆動させている。P30はJBLの375と同クラスのドライバーとなるがダイアフラムがより薄く軽量になっているためより高域再生能力に優れ、また効率も高く同社の103LX 38cmウーファー2発と同等のエネルギーを備えている。市場価格は65万円前後ペア



X600 X-over

P30ドライバー専用の600Hzクロスネットワークで大型のコイルとオイルコンデンサーで構成されている。ケースの材質はベークライトで中は振動止めにぎっしりとピッチで埋められている。市場価格は9~12万円ペア



103LX Woofer

1940年代後期から作られている当社最高品位の38cmウーファーで、とても軽く張りのあるコーン紙にかなり大型のアルニコマグネット搭載しているため、とても音の解像力が高く、感度もAltec 515を上回るほど。有名なJBL150-4Cはこれと同じようなコーン紙が使われており、ずば抜けた密度の高い中音域とクリアでぬけの良い音質はその強力型ともいえる。市場価格は50万円前後ペア



P-52HF

1940年代初め頃から生産されている38cmユニット専用のエンクロージャー。当時は38cm同軸ユニット206AXが搭載されてプロ用スタジオモニターとしても活躍していた。Altecの銀箱G12と外観、材質が似ていて容積もほぼ同じくらいだが、縦長のフロアタイプとなっていて、より低音が出る構造になっているため、セッティングがしやすくなっている。また、103LXウーファーと8セルホーンドライバーを搭載させると、J.B.ランシングが開発した事で知られるアイコニックスピーカーと同等なシステムとなる。



いつもの目黒にあるアトリエJe-teeを飛び出すところから話が始まった。向かった先は同店の倉庫だ。東京から高速で西へ小一時間ほど走った場所にある。多くの製品は輸入されてから、当座そこで待機して出番を待つ。「ヴィンテージ・オーディオの倉庫」というフレーズはどこかわくわくさせるものがあるが、薄暗い蛍光灯がジワーとなるホコリっぽいビルの一室をぼくは想像していた。着いてみると、そこは広さにして50畳、製品は壁際に積まれていて、中央に試聴スペースが空いている。フロアスタンドやお洒落なイスまでもある。店に運びきれない大型スピーカーをお客さんと聴くこともあるそうだ。居心地がいいわけだ。ということ、移動させるのが一苦労の巨大スピーカー、トウルーソニックP63HFが今回の主役になる。誌面では切り抜き写真になっていると思うが、ものしきは伝わりにくいだろう。38cmウーファーが水平に2発ついている。たいていその場合、デザインは横長のエンクロージャーになるものだが、これは豪勢にも縦に長いのだ。

日本初登場となる稀少品らしい。モノラル時代の1点ものだから、ペアでそろえるのに6年もかかったとオーナーの岡田さんは言う。うれしいのは、お客さんにまだ披露していないので、これが試聴でつかいスケールを満喫しましょうという意図があったのか、岡田さんはデューク・エリントンとカウント・ベイシールのビッグ・バンドを連続してかけた。目黒の店とは違い、人耳をはばからない音量だ。これには、ややよとなった。グレート・アメリカン・パワーが噴出する。なおアンプは、75Wのパワーを誇るウエスタンKS-16610だからゴージャスの極みなのである。そして物量に頼ってひたすら押しの手だけではない。高域ドライバーの振動板が軽く上質で、現代録音のアコースティック楽器や女性ヴォーカルもいける。これが半世紀以上前の2ウェイ・スピーカーとはね……うーむ、である。そしてサラサラしていない芯の強さがある。測定しても値に出てこない強さだ。ここで一歩押し進めて、同じトウルーソニックのトウィーターを追加して3ウェイにしてみた。ノラ・ジョーンズやマドンナなどの新しい録音には、全体が柔らかくなってしっとりする。フォープレイのフュージョンは切れ味が命の音質なので、これはトウィーターがあった方がいい。最後にリンの高音質録音盤「ペリウス・組曲「ペレアスとメリザンド」」がかかった。豊かな弦の響きとエンクロージャーの鳴りがうまくマッチして、目をつぶっているとずっぴりホール・コンサート気分。だが、ふと見回すとそこは倉庫。オーディオのイリュージョンをしんから体験した。

日本初登場の巨大スピーカーを堪能
ずっぴりホール・コンサートの気分